



2023年4月
七尾市立図書館
友の会発行
発行責任者
芹田玲子

定期総会は5月20日(土)に

澤田祐一氏が記念講演

元イスタンブール
日本人学校教諭

図書館友の会は第五四回定期総会を左記のように開きます。記念講演もありますのでぜひご参加ください。

未定ですがこの七月に「ミナ・クル祭」と「図書館まつり」が再開されると、すべてコロナ前にもどります。友の会の活動もコロナ以前に復帰ですが、もどらないのが会

員数です。原因は①人口減で図書館利用者も減った②スマホにより本を読まなくなった③高齢化で外出もむづかしいなど考えられ、減少のストツプは困難な状況です。

とはいえ、「図書館で本好きが夢を語りあい、ボランティアや郷土図書の出版を通してこの地に尽くす」そんな

第54回 定期総会のご案内

5月20日(土)午後2時~4時
フォーラム七尾・4階中ホール

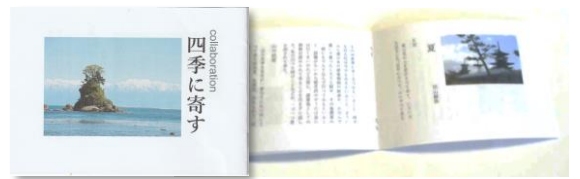
第一部 議案審議

令和四年度をふりかえり、五年度の行事について考える、会員のご意見を生かします。

第二部 記念講演

講師 澤田祐一氏
演題「(仮)トルコ滞在記」

自作本「ジン」とは



「自分だけの本を作りたい」いま、自分で作る小冊子「ジン」が密かなブームだとか。ジンとはマガジンからの造語。そこで編集子はジンを試作してみました。写真や文章を選び、パソコンで紙面をレイアウトし、プリンターに冊子印刷を指定するのがミソ。印刷できたら縦とじホッチキスでとめて、世界で1冊しかない本が完成しました。たった16ページですが、これは面白い。ジンに興味ある方、一緒に作りませんか。友の会でお手伝いします。

八崎和美教育長を訪問

友の会の活動は伝えて行かねばなりません。

ただいま新規・継続の会員募集中です。会費は年五百円です。よろしくお願ひします。

トルコはどんな国？

記念講演はイスタンブールの日本人学校で教壇に立たれた澤田祐一さんが話されます。いま食料もエネルギーも日本人の生活は海外に働く人の努力なしには考えられません。そのご家族のため日本人学校は大切な存在です。

トルコはどんな国なのか、どんな暮らしをしているのか、知っているようで知らないことばかり。トルコへ旅行したい方には、先生の体験談が必須課目です。



去る一月十日、新たに就任された八崎教育長に、芹田会長ほか五名が表敬訪問をしました。

教育長のお母さまが友の会に入っておられた話題から始まり和気あいあいの懇談となりました。当会からは、桜町にある杉森文庫室の入る建物のトイレが水道設備故障で使えないので修理してほしいなどの要望もできました。最後に教育長から、新年度には入会をして下さるとの言葉も戴き一同感謝して退室をしました。

本の虫

ジュネーブにホテルをとり、もう夜明けに近い時刻だった。考え事で眠られ

ずベランダへ出た。ふとそのとき、暗い夜空にぽつんと白く光る点を見つけた。何だろうと見続けるとそれがだんだん大きくなり、数分後に三角形に変わった。夜があけてきて、私はようやくわかった。ヨーロッパで一番先に朝日を迎える4800メートルのモンブランの頂が暗やみの中に姿をあらわしたのだった(笹本駿二著・第2次世界大戦下のヨーロッパ・岩波新書) ▼特派員だった笹本さんが目をうばわれたシーンの要約である。明けゆく空が戦争の終わりを暗示するようだ。ところで、モンブランは暗やみのなかでも山頂が輝いて見えるのだろうか。以前に七尾で英語講師を勤めた米国の知人がスイスに滞在中と聞き、メールで問い合わせたことがある。つまらない質問に応えはなかったが▼それにしてもミヤンマー、ウクライナ、暗やみに光はまだ見えない。T

煎茶道のたのしみ

「朝茶は福が増す」

北山 一子

私は平成元年に、松月流煎茶道の入門初伝を習得しました。お点前の精神世界や、文人たちにより発展した煎茶道の奥深い魅力など、先人たちの煎茶への思いに憧れて今日まで学び続けてきました。先年来のコロナ禍のもとで



松月流煎茶道のお点前

は、対面対応の茶会や行事が中止となりました。私は自宅での、少人数の煎茶の会に新たな楽しみを見出しています。このような時代だからこそ、今も昔も決して変わらないものがあるという「無古今色」という言葉の意味をしつ

かりと心にとめて、日々を過ごして行きたいと思っています。こんなことわざをご存知でしょうか。
「朝茶は福が増す」。
朝にお茶を飲む習慣は幸運を招き、災難から身を守る生活の知恵として、古くから語り継がれてきました。それぞれの生活スタイルの中で無理なく伝統を受け継ぎ、心静かなお茶時間を楽しんでいたければ、と思います。

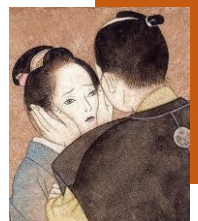


志賀町来入寺の水芭蕉 撮影/寺野時雄

水芭蕉といえば尾瀬と答える人も多い。深田久弥は著書「日本百名山」のなかで、「バスの発達した現代の人々にはこの気持は分からないだろうが、昔は長い道を徒歩で辿ってきて、南からする人には三平峠、北からする人には沼山峠を越えて、尾瀬沼のほとりへ出、その傍らにそびえ立つ燧岳を眼にした時には、それこそ本当の仙境

であったに違いない」と述べている。その尾瀬は江間章子作詞・中田喜直作曲「夏の思い出」がきっかけで、今ではシーズン中は木道が人であふれるという。尾瀬は高地なので水芭蕉の見ごろは五月下旬から六月の「夏」だが能登では桜の咲くころが良い。静かな来入寺の庭でなら、夢みて咲いている水芭蕉の独り言を聞けるかも知れない。

この本



流人道中記(上)(下)

るにん 浅田次郎著

〈中央公論新社刊〉

「痛(いて)えからいやだ」切腹を拒み、蝦夷(えぞ)松前藩への「預」(あずけ)となった、旗本の青山玄蕃(げんぱ)。押送を命じられた、南町奉行所見習与力の石川乙次郎(おとしじろう)。江戸から北へ向かう二人の物語が、2018年7月1日から読売新聞朝刊に連載されました。

19字×47行という制約の中で、読者を徐々に奥州路へ引き寄せていく作家の技量。旅籠の灯、松並木の霧など、物語に彩りや陰影を添える挿絵。朝が楽しみにになります。

旅を続けるうちに、乙次郎は「玄蕃は本当に罪人なのだろうか?」という疑問を抱くようになります。玄

蕃と語るほどに、深く毅然としたものに目が開かれていきます。

2019年10月13日、455回にわたる連載が終了。二人の旅人を見送る朝が来たのでした。(菊)

この本は七尾市立図書館にあります。また、新聞に掲載された挿絵の一部を、イラストレーター

宇野信哉さんのホームページで見ることが出来ます。

